

令和元年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)実績報告書(プログラム実施報告書)
 (研究成果公開促進費)「研究成果公开发表(B)
 (ひらめき☆ときめきサイエンス~ようこそ大学の研究室へ~KAKENHI)」

課題番号： 19HT0218 プログラム名： 染色と刺繍を体験して、アジアの民族衣装を着てみよう！														
	<table border="1"> <tr> <td>所属</td> <td>名称</td> <td>国立大学法人 大分大学</td> </tr> <tr> <td>研究機関</td> <td>機関の長職・氏名</td> <td>学長・北野 正剛</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">実施代表者</td> <td>部局</td> <td>教育学部</td> </tr> <tr> <td>職</td> <td>准教授</td> </tr> <tr> <td>氏名</td> <td>都甲 由紀子</td> </tr> </table>	所属	名称	国立大学法人 大分大学	研究機関	機関の長職・氏名	学長・北野 正剛	実施代表者	部局	教育学部	職	准教授	氏名	都甲 由紀子
	所属	名称	国立大学法人 大分大学											
	研究機関	機関の長職・氏名	学長・北野 正剛											
	実施代表者	部局	教育学部											
職		准教授												
氏名		都甲 由紀子												
<table border="1"> <tr> <td>開催日</td> <td>令和元年 12 月 8 日(日)</td> </tr> <tr> <td>実施場所</td> <td>大分大学 旦野原キャンパス 教育学部被服実習室 福祉健康科学部 213 号室</td> </tr> <tr> <td>受講対象者</td> <td>中学生・高校生</td> </tr> <tr> <td>参加者数</td> <td>17 名(小学 6 年生 1 名・中学生 8 名・高校生 8 名)</td> </tr> <tr> <td>交付申請書に記載した募集人数</td> <td>20 名</td> </tr> </table>	開催日	令和元年 12 月 8 日(日)	実施場所	大分大学 旦野原キャンパス 教育学部被服実習室 福祉健康科学部 213 号室	受講対象者	中学生・高校生	参加者数	17 名(小学 6 年生 1 名・中学生 8 名・高校生 8 名)	交付申請書に記載した募集人数	20 名				
開催日	令和元年 12 月 8 日(日)													
実施場所	大分大学 旦野原キャンパス 教育学部被服実習室 福祉健康科学部 213 号室													
受講対象者	中学生・高校生													
参加者数	17 名(小学 6 年生 1 名・中学生 8 名・高校生 8 名)													
交付申請書に記載した募集人数	20 名													
<p>プログラムの目的</p> <p>文化・芸術的側面と科学的側面を併せ持つ研究テーマを、生活科学的に研究することの魅力・面白さを中学生・高校生に伝えることを目的とした。特に植物や動物由来の資源を人間の生活に利用することに関しては、食物以外の用途を改めて意識してもらいたいと考えた。その為に、衣生活素材の生産と利用の方法について、ブータンや地域的に関連の深い雲南省やミャンマーで传承されている染織刺繍にまつわる伝統知識をもとに紹介した。染色と刺繍の実習やブータン・雲南省の人々の衣生活を垣間見る映像教材の視聴をとりいれつつ、染色にまつわる科学的な研究手法を紹介することで、文系理系の分類にとらわれずに生活科学を対象として文理融合の研究を行うことの面白さを伝えたいと考えた。</p> <p>文化的理解だけでなく科学的な解明をも目指す研究テーマの一つとしてブータンなどの染織刺繍文化や技術に関する講師の研究を紹介し、受講生に文化と科学両方に対する好奇心を持たせた。生活科学は人間が生きる上で関わる生活全般にわたる重要な分野であり、自分たちや次の世代の財産となる不可欠の技術や文化に関わっていることを理解させることを目的とした。</p>														

プログラムの実施の概要

○受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

本プログラム参加者として小中高生 17 名、ゲスト講師の防衛医科大学校の朝比奈はるか先生とブータン刺繍専門家の菊池多絵先生、学生 5 名、運営ボランティア 1 名の 25 名の参加があった。日本学術振興会研究事業部の深澤はるか氏と保護者が見学した。工夫した点については、講義内容を分かりやすく伝えるため昨年度まで使用したスライドや動画、講義テキストを大幅に更新し、講義中も天然染料の実物や民族衣装等を使って講義を行い、可能な限り実習や体験が多くなるよう計画して印象に残りやすくなるようにした。人数が多くなったので、民族衣装着装のチャンスを 3 回に分散させて希望者は全員民族衣装を着られるようにした。

○当日のスケジュール

- 9:00- 9:30 受付(教育学部被服実習室 集合 民族衣装着装①)
- 9:30- 9:50 開講式(挨拶、自己紹介、1 日のスケジュール確認)
- 9:50-10:20 講義(民族衣装の形と種類、染色実習の進め方の解説)
- 10:20-10:30 休憩
- 10:30-12:00 染色実習(天然染料による刺繍糸とポケットチーフの染色、染色科学研究の魅力・染料の解説)
- 12:00-13:00 昼食(民族衣装着装②)
- 13:00-14:30 刺繍の実習(染色した刺繍糸を使った刺繍)
- 14:30-15:00 ティータイム(参加者の交流、中国の茶文化紹介、民族衣装着装③)
- 15:00-15:45 講義(照葉樹林文化圏のフィールド調査と広域研究)
- 15:45-16:00 休憩
- 16:00-16:15 講義(研究職の仕事、科研費の説明)
- 16:15-16:30 修了式(アンケート記入、未来博士号授与)
- 16:30 終了・解散



○実施の様子

開始前、都甲所有の民族衣装と朝比奈先生と菊池先生にもご持参いただいたもの、雲南省調査中に入手したイ族の民族衣装と APU 留学生にいただいたブータンの男性用民族衣装、朝比奈先生がミャンマーで購入して用意してくださったミャンマー男性用シャツも揃え、早めに到着した参加者がそれぞれ選んで着装した。

1 挨拶、講師紹介、講義(都甲 民族衣装の形と種類、染色実習の進め方の解説)

実施代表者による挨拶、講師の紹介、参加者の自己紹介、スケジュールの確認を行い、都甲より、民族衣装・天然染料に関する講義をして次の実習の進め方を解説した。

2 染色実習(ラック、蘇芳、インド茜、樫、黄檗によるポケットチーフと刺繍糸、多織交織布の染色)

ブータンより持ち帰ったラック、購入した蘇芳とインド茜、樫、黄檗の 5 種類の染料を使用して、ポケットチーフと刺繍糸、多織交織布を染色した。ポケットチーフはビー玉・おはじきと輪ゴムを使って絞りの模様を入れた。

染色を体験したことのない参加者も多く、終始楽しそうな雰囲気だった。待機中の時間を使って、染色科学研究の魅力や染料動植物の解説をした。

3 昼食 刺繍糸を乾燥させながら、和やかな雰囲気の中、昼食をとった。昼食後にも民族衣装着装を促し、希望者に着せた。



4 刺繍の実習(菊池・都甲 染色した刺繍糸を使った刺繍)

菊池先生の刺繍を鑑賞した後、染色した刺繍糸を用いて菊池先生の指導でテーブルセンターに刺繍を施した。2色の糸を用い、チェーンステッチで渦巻きを作るブータンの刺繍技法で刺繍を体験した。

5 ティータイム、ブータン・雲南省の民族衣装装着体験

ティータイムの時間には、お茶を飲みながら中高生、大分大学の学生、講師皆で交流した。中国の茶文化に触れる時間として、雲南省のお茶も本格的な茶器で飲み比べた。菊池先生の作品や民族衣装の鑑賞もした。

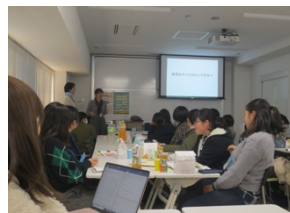


6 講義(朝比奈 雲南省・ミャンマーのフィールド調査)

朝比奈先生から自身が研究代表者としてフィールド調査した、雲南省・ミャンマーでの調査の様子や薬用植物に関する研究内容、異分野で連携して研究することのおもしろさについて講義をしていただいた。

7 講義(都甲・朝比奈 研究職の仕事、科研費の説明)

研究者になるための自身の体験や道筋、研究職の仕事内容、科研費事業の取り組み内容について説明した。



8 修了式(アンケート記入、未来博士号授与)

最後に、修了証を渡してアンケートをとり、終了した。

参加者の声：・今日たくさんの事を学べてとても楽しかったです。また来年あればぜひ来たいです。

・研究について、非常に興味がわきました。学生でOKなら、テーマを決めて研究してみたいです。

・民族衣装は染め方や織り方にも現地の特徴が表れていて、興味がわきました。文系でも研究という道があることを初めて知ったので、いい経験になりました。

・友達にさそわれるまで来るつもりではなかったけど参加してとても楽しかったし、勉強になりました。とてもいいタメになるものでした。

●事務局との協力体制

事務局との協力では、開催までの準備として、日本学術振興会との連絡調整、提出書類の確認・修正、広報担当課と連携した宣伝、参加申し込みの受付、委託費の管理について協力を受け、開催当日は、会場準備、受付、保険手配、お弁当受け取り等について協力を受け、円滑に開催することができた。

●広報活動

本年度は下記の広報活動を行った。今回5回目で、募集20名に対して参加者は17名であった。これまでで最も多い人数の参加があった。くり返し開催することで中高教員との信頼関係や中高生同士の評判により参加者の増加が見込まれると考える。鹿児島や福岡といった遠方からの参加もあった。

・ポスターとチラシを作成して県内の中学校・高校に配布した。

・近隣の高校には直接訪問し理科・家庭科・進路指導の教員に宣伝をお願いした。

・大学の公式ホームページ、Facebook等、インターネット上で宣伝をした。

・チラシを配布した学校のメールアドレス宛に再度宣伝を依頼した。

●安全配慮

プログラム実施日の参加者を対象として傷害保険に加入した。染色を行う際にガスの火を使い、また、刺繍では針やハサミ等を使用するため、研究室の学生を配置し、火傷や怪我のないよう配慮した。

●今後の発展性、課題

例年のように参加者の確保に苦労したが、開催当日は、海外をフィールドとした生活科学の研究に関心をもってもらうことができたと感じている。また、何よりも一日中笑顔が多く見られ、参加者の様子やアンケートの結果から参加者の満足度は高いと感じられたため、次回、開催時期や広報活動など今回の反省点を生かして内容を整理し、より多くの参加者を集めて今後も開催したいと考えている。